

F (藤田スケール) の強さ

レベル	風速 (m/s)	被害
F 0	17~32	煙突やテレビのアンテナが壊れる。小枝が折れ、根の浅い木が傾くことがある
F 1	33~49	屋根瓦が飛びガラス窓が割れる。根の浅い木は倒れ、強い木の幹が折れる
F 2	50~69	住宅の屋根が飛ぶ。弱い物置などは倒壊する。大木が折れる。自動車が吹き飛ばされる
F 3	70~92	住宅が倒壊。列車が転覆する。森林の大木でも大半が折れるか倒れる
F 4	93~116	住宅がバラバラになって飛散。列車が吹き飛ばされ、1ト以上の物体が降ってくる
F 5	117~142	住宅は跡形もなく吹き飛ばされる。数トもある物体がどこからともなく降ってくる

藤田スケール 竜巻の規模を示す国際基準で、米シカゴ大名誉教授の故・藤田哲也博士が71年に提唱した。住宅や樹木の倒壊状況などから、竜巻の強さをF 0~F 5の6段階に分類している。

国内最大規模か

90年千葉と同様の可能性

竜巻は、強い上昇気流によって渦巻き状の風

大死亡

出たのは初めてだった。

埼玉県吉岐市では、97年10月15日午後2時前後に、二つ竜巻が相次いで発生し、男児が死亡したほか、サッカーをしていた中学生が落雷を

らまでに計6個の竜巻が

中に吸い込まれてゆく現象だ。名古屋大地球水循環研究センターの坪木和久助教授(気象学)は「(国内で過去最大の竜巻だった)90年12月の千葉県茂原市のケースと、発生した大気状況がよく似ている。被害状況からみて、今回も藤田スケール(F)2~3の国内最大規模の竜巻だった可能性がある」と分析する。

日高地方に出現しており、その後、北海道を縦断する形で北北東に移動していた。「1時間以上に及ぶ長寿命の積乱雲で、かなり強い上昇流を持っていただけで、これが強い竜巻を起こす原因となった」と説明する。

また、「被害のあった佐呂間町だけでなく、人家のない地区など積乱雲の経路で複数の竜巻が起きた可能性もある」と説明する。

【山田大輔】